闇社会に囚われし
美女の末路
後編
作者
大黒達也

『闇社会に囚われし美女の末路　後編』

作者　大黒達也

一．あらすじ

ある日、ふとしたきっかけで知り合った女を、暴力団から助け出すべく立ち上がったサラリーマンの戦い。性交奴隷に落とされ、薬をうたれ、獣のように犯され最後には食肉として調理され貪り食われる若くて美しい女。官能的なレイプシーンや銃撃シーンが満載。

二．登場人物

大黒（おおぐろ）　達也（たつや）
サラリーマン、家族とは別居中

柴（しば）　紀子（のりこ）
旅行者、謎の女

原（はら）　美樹（みき）
柴　紀子の姉、フリーライター

岩崎（いわさき）　順子（じゅんこ）
スナック順子のママ

権藤（ごんどう）　龍一（りゅういち）

人身売買組織を運営する暴力団の組長

村瀬（むらせ）　昭雄（あきお）

権藤組の若頭、冷酷非情な性格の持ち主

ルスコイ

謎のロシア人、大黒の協力者

イリーナ

バー‘ロシアンルーレット’の女主人

『本編』

第七章　覚　醒

紀子が寝ている部屋のドアをそっと開け、ふたりで中に入った。紀子は安らかな寝息を立てていた。点滴が空になっていたので、恵子が点滴の針を外した。ふたり足音を殺して部屋を出た。大黒は三部屋ある寝室の一部屋に恵子を案内した。

「お休み。また明日」

「一緒に寝てくれないの？」

「今夜は一人にしてくれないか」

恵子は拗ねた顔をしてドアを閉めた。大黒は残りの一室に入り、素っ裸になってベッドに入った。睡魔が襲ってきて一瞬で眠りに落ちた。真夜中に一の気配で目が覚めた。ベッドの側に恵子が立っていた。

「どうしたんだ？」

「眠れないの。一緒に寝させて」

「好きにしろよ」

恵子はベッドに潜り込み、大黒の股間に手を入

れてきた。
「私のお守り」
暫くしの間、ペニス弄っていたが、握ったまま寝息を立て始めた。それを追うように大黒も眠りに落ちた。

朝、大黒が目覚めると、隣に眠っている筈の恵子がいなかった。ジーンズに両足を通し、カッターシャツを着て部屋を出た。紀子の部屋を覗き、眠っていることを確認して一階に降りた。恵子が朝食の支度をしていた。パンを焼く香ばしい匂いが居間に満ちていた。
「オハヨウ。よく眠れた？」
「いい匂いだな」
「小麦粉があったんでパンを焼いたわ。ああ、そうそう家の裏に鶏を飼っているのね。卵が二個見つかったわ」
飼っていると言っても、つがいを二羽、広い空き地に策を設け放し飼いにしているだけだ。餌もやらないから虫とかミミズを常食としており、ほ

とんど野性化していた。二人で、焼き立てのパンとベーコンの朝食をとった。朝食を終え、二人で紀子の部屋に向かった。恵子は紀子の朝食は用意していなかった。ドアを開けると紀子は既に目を覚ましていた。両手両足を縛られた状態で身体を激しく動かしていた。二人が入ってきても感心を示さなかった。大黒が猿轡と両手両足のひもを外した。紀子は激しいくしゃみを連発した。目にはいっぱいの涙を溜めていた。時折吐き気を催すのか、「うっ」と呻いた。

「お願い。薬をちょうだい。何でも言うことを聞くから」

恵子が紀子の裸の背中をさすっていた。

「禁断症状よ。もっと酷くなるわ」

紀子がベッドの上に嘔吐した。昨日から何も食べていないので吐いたものは胃液だけだった。紀子がベッドの上で膝を抱えた姿勢で丸くなっていた。身体が小刻みに震えている。大黒は紀子の背後に横たわり、押さえつけるように抱きしめた。紀子は強い力で大黒を振り払おうとした。

「おー。おー。痛いよ」

紀子の悲痛な叫びが部屋に響いた。

「恵子。昨日の薬を頼む」

恵子は部屋の片隅に置いておいた。ジュラルミンケースの蓋を開け、小さな注射器を取り出し、紀子の腕に刺した。

暫くの間、症状は収まらなかった。その間、大黒は紀子を後ろから抱きしめていた。発作が収まり安らかな寝息が聞こえた。いつのまにか紀子は寝入っていた。紀子をベッドから抱え上げ、シャワールームに運び床に寝かせた。胃液の悪臭に包まれた紀子の身体に湯量を押さえたシャワーをかけていく。ボディーソープを染み込ませたスポンジで体中を洗った。

ヘロインのせいで痩せたようだが、乳房や尻にはまだ十分な張りがあった。股間を洗うとき鋭い欲望を感じた。ボディーソープをシャワーで洗い落とし股間に口を付け、しばらくそうしていた。気配を感じて振り返った。入口に恵子が立って、大黒をじっと見つめていた。

「点滴の準備は終わったわよ」
「そうか」
大黒はバツが悪かったが、表情には出さなかった。ベッドのシーツは取り替えられていた。紀子の身体をタオルで拭き、ベッドに寝かせ、両手両足をベッドの足に紐で固定した。猿轡は嘔吐した時に窒息の危険があるのでやめることにした。恵子が点滴の針を紀子の右腕に刺した。二人で居間に戻りソファに座った。大黒の表情は暗かった。ヘロイン患者の禁断症状は初めて目にするものだった。紀子が別人のように感じていた。
「気分転換に散歩でもしたら」
「……」
「心配はいらないわ。こんな山奥だもの逃げようなんて思わないから」
「近くに沢があるんだ。やまめが、いっぱい捕れる」
「ヤマメって、旅館で食べたことがあるわ。天ぷらが美味しかった」
「今晩のおかずにしようか？」

「うん」

恵子の顔が期待に輝いた。大黒は釣り竿を手に別荘を後にした。恵子が裏切らないと完全に信じた訳では無いが、車の鍵はポケットの中だし、恵子の言うとおりこんな山奥では逃げようとはしないだろう。その沢は別荘のすぐ裏にあった。五十メートルと離れていない。適当な岩場に腰掛け，川幅ニメートル、水深三十センチ程の清流に釣り糸を垂れた。水草が流れに揺らめいていた。空は雲ひとつない秋晴れだった。無心に竿の先を見詰めているとふと今年六歳になる娘のことが思い浮かんだ。子供ながらに母が生きていると信じ帰ってくることを待ち望んでいた。目頭がひとりでに熱くなった。大黒は妻を疑っていたことを深く後悔していた。

涼子は死ぬまで家族のことを愛していたのだ。大黒は運命を呪い、家族をバラバラにした者達に復讐を誓った。地の果てまでも追いつめて思いを遂げるつもりだった。大黒はやおらバック社製のナイフを引き抜き、五メートルほどの距離にある

樹径約五十センチの白樺に投げつけた。「ブオン」という風を切る音がして、ナイフが突き刺さった。不敵な笑みを浮かべ、また竿先に視線を戻した。「ガクッ」という振動が手元に伝わった。竿先が小刻みに震えている。大きくしなった瞬間に竿を上げた。二十センチほどのヤマメがかかっていた。

大黒が釣りに出かけた後、恵子は朝食の後片付けを始めた。それが終わりソファに座り窓から外の景色を眺めていた。恵子は密かに大黒に感謝していた。強制と雖も罪の無い女達を臓器移植の犠牲とすることに強い憎悪の念を抱いていた。反抗することによる結果が恐かった。男達による陵辱の後に同じ運命が待っていた筈だ。死んだ医師の山田実とは、身体の関係があった。山田の死に少なからずショックを受けていたが、今はもう何も感じていなかった。今は大黒に強く惹かれていた。大黒が紀子を愛していることはわかっているが、気持ちを押し殺すことはできなかった。何れ紀子が元に戻った時が不安だったが、だからと言って紀子をどうにかしようとは思わなかった。

ふと、二階に寝ている紀子のことが気になり、様子を見に行くことにした。ドアを開けると安らかな寝息を立てていた。女の目から見ても紀子の寝顔は美しかった。毛布が乱れ、片足が見えていた。長く、陶磁器のような滑らかな肌を持った足から視線が離せなくなり、何時の間にかベッドの脇に立ちじっと見詰めていた。手が自然と毛布を剥いでいた。シャワーを浴びせ身体を拭いただけで、何も着せていなかったので全裸のままだ。太股の間の茂みを指でかき分け、指を入れた。そこはじっとりと潤っていた。空いている方の手で仰向けに寝ていても平らにならず、形を保った乳房を軽く揉んだ。

恵子はヤクザ達が浚ってきた女達とのＳＥＸを思い出していた。恵子には元来、同性愛の趣味は無かったが、ヤクザ達に強制され、仕方なく女達を抱いた。始めは抵抗感があったが、美しい女達の柔らかな肢体を弄ぶ感覚に我を忘れることもあった。ヤクザ達による強姦の後で、咽び泣く女を背後から張形で犯したこともあった。すべすべの

白い尻を抱く感覚に脳が痺れたことを思い出した。女達とのＳＥＸに限りは無かった。しばらく手による感触を楽しんだ後に、股間に顔を入れ舌による愛撫を始めた。紀子が「うっ」と呻いたので、慌てて離れた。紀子は眠ったままだ。恵子は首を横に振り、「馬鹿ね」と独り言を言って部屋を後にした。

それから、何事も無く一週間が過ぎようとしていた。紀子は順調に回復へと向かっていた。禁断症状も収まり、粥のような軽い食事も採れるようになっていた。ただし、激しい禁断症状の反動のためか、部屋で窓の外をボーッと終日眺めていることが多かった。精神に異常をきたしているかどうか、素人の大黒にはわからなかった。その日は、秋晴れの風の無い暖かい日だった。大黒は恵子に紀子をまかせ、裏の渓流で釣り糸を垂れていた。

大黒は紀子が回復次第、次の行動、すなわち権藤組への復讐にかかる予定だった。そんなことを考えながら、釣り竿の先端をボーッとした表情で眺めていた。

その時、突然、背後から笹の葉を踏み分ける音が聞こえた。羆だろうか。大黒はとっさにベルトに差したトカレフを引き抜き振り返った。そこに、白いバスローブを羽織った紀子が立っていた。素足にサンダルをはいていた。

「紀子」

「……」

「どうしたんだ？」

紀子は無言で近づき、傍らの岩に腰掛けた。

「素晴らしい陽気ね」

紀子は水面を見つめ、右手で長い髪を掻き上げながら、そう言った。

「ああ。そうだな」

「ここはどこなの？」

「ニセコの山奥さ」

紀子の視線は、大黒の右手のトカレフに向けられた。

「そんな物どうするの？」

大黒はトカレフをベルトに差しながら、

「何も覚えていないのか？」

と言った。

「覚えているわよ。忘れたいけどね……貴方に救われた事以外は……」

「皆忘れるといい。君にとっては過去の事だ」

紀子は答えず、立ち上がりバスローブに手をかけた。

「何？」

紀子は大黒の方に向き直り、バスローブを一気に脱ぎ捨てた。目映いばかりの裸身が、川面に反射した。原生林の中に出現した妖精のようだ。

「抱いて。何も言わないで」

大黒はジャンパーを脱ぎ、それを地面に敷いた。紀子を抱き上げ、その上に仰向けに寝かせた。

「美しい。君は本当に美しい女性だ」

唇を重ね、お互いを貪り合った。大黒は紀子の透けるような柔肌を慈しむように舌を這わせていった。乳房、膣、尻へと欲望は果てることなく続いた。紀子は大黒の頭を太股に挟みながら一回目の絶頂迎えていた。

二日後の夕方、大黒は深い霧の中を、オデッセ

イに乗り、ニセコの別荘を後にした。紀子と恵子は別荘に置いてきた。二人にはちょっと用足しに行くと伝えていた。遅くとも一週間で戻るということも。

大黒は国道二百三十号をひた走り、札幌を抜け、国道五号に入り小樽を目指していた。小樽には四時間弱で着いた。時刻は午後九時を過ぎていた。

イリーナの店"ロシアンルーレット"が目的の場所だった。店の近くの路地にオデッセイをとめた。現金の詰まったスーツケースを手にし、車を降りた。その現金は権藤組から強奪したものだ。見覚えのある小路に入った。

その突き当たりの雑居ビルの裏口を開け中に入った。階段を上がり二階の踊り場に面したスナックの扉を開けた。

「達也」

店の奥から、聞き慣れた声がした。すぐにイリーナがウオッカの酒瓶を右手に持ち、現れた。

「どうしたの？あれから何も連絡が無いので心配

してたのよ」
イリーナは軽い怒りと喜びが混じった複雑な表情をしていた。
「済まない。ちょっとした訳があってね。山奥で隠棲していたんだ」
「隠棲？」
「隠れ住むことさ」
「ふーん。まあいいわ。今日はゆっくりしていけるんでしょう？」
イリーナは大黒の手を引き、店の奥に案内した。
一組の外国人カップルがカウンターで飲んでいたが、帰る時間らしく立ち上がった。
「ちょっと待っていてね」
イリーナは客を送りに、店を出ていき、またすぐに戻ってきた。
「今日は、店を閉めたわ。二人で朝まで飲みましょう」
「そうしたいのはやまやまだが。ルスコイに用があるんだ」
「そうだと思ったわ。でもね。用事が済んだら私

の相手をするのよ。そうじゃないと彼奴を呼んであげないから」
「わかったよ」
大黒はカウンターのスツールに腰掛けた。イリーナがすぐにグラスとウオッカの酒瓶をカウンターに置いた。
「一人で飲んでいて。彼奴と連絡をとるから」
そう言って、電話機の受話器を取り上げた。ダイヤルしてすぐにロシア語で話し始めた。どうやら連絡が取れたらしい。電話を終え、隣のスツールに腰掛けた。
「これ飲んでいい？」
大黒が無言で頷いた。大黒のグラスをとり、一口を含み飲み込んだ。
「後、一時間で来るそうよ。それまでどうする？」
イリーナは意味ありげな表情を浮かべた。
「店の奥はどうなっている？」
「小さな部屋があるわ。ベッドもね」
イリーナは大黒の手を引き、店の奥へと案内した。

約一時間後、"ロシアンルーレット"の扉を叩く音が、店内に響いた。その頃、大黒とイリーナはカウンターでウオッカのグラスを傾けていた。イリーナの顔色は、少し酔ったのか頬にほんのりと赤みがさしていた。

「今、開けるわよ。お願いだから扉を壊さないでね」

イリーナが立ち上がり、入り口に向かった。すぐに複数の人間の重い足音が店内に響いた。

「達也、久しぶりだな」

ルスコイが人なつこい笑顔を浮かべて立っていた。その後ろには雲をつくような大男が二人立っていた。

「イワノフにセルゲイだ。二人とも半年前まで軍に所属していた」

ルスコイが二人を紹介した。二人とも二メートル位の身長で、金髪にブルーの瞳を持っていた。まだ若く、二十代といったところだろうか。

「この間は、世話になった」

「ハジキのことか？……役に立ったか？」

「ああ」
その時、イリーナが話に割って入った。
「何、こんなところで立ち話しているのよ。ボックス席に坐ってちょうだい」
図体の大きな四人がボックス席に坐ると、窮屈な感じがした。ルスコイは大黒の右隣に坐った。イリーナが四人分のグラスとウオッカの酒瓶をテーブルに置いた。
「簡単なつまみも用意するわね」
と言いながら、店の奥に消えた。
ルスコイはグラスを手にし、虚空を見つめ、
「イリーナはいい女だろう」
と言った。
「そうだな」
「そうだろう。気に入ったのなら嫁に貰ってくれ」
「……」
「そうか。お前には惚れた女がいたんだな」
イワノフが四人のグラスに、ウオッカを並々とついだ。ルスコイがグラスを持ち上げ、日本式に「乾杯」と言って一気に飲み干した。三人がそれ

に続いた。
「ところで話を聞かせてもらおうじゃないか」
ルスコイが、大黒の方に身体を近づけた。
「日本円で五千万出す。武器と腕の立つ人間を何人か紹介して欲しい」
「武器？」
「ＡＫ四十七とバズーカがあれば最高だな」
「戦争でも始めるのか？」
「暴力団をひとつ壊滅させる」
「ほう」
ルスコイは先ほどから無言で飲み続ける二人のロシア人に耳打ちした。二人の顔がはっと輝いた。大黒を除く三人は、早口のロシア語で話始めた。二人のロシア人は時々、大黒の方に視線を向けた。
「本当に五千万なんだな？」
ルスコイの問いに答えるように、大黒は足下において置いたスーツケースをテーブルの上に置き、鍵を外し、中身を開けた。万札の束がいっぱい詰まっていた。
「いいか？」

ルスコイは大黒に確認すると、札束のひとつを手に取り、慈しむように頬ずりした。

「ＡＫ四十七は無いが、ＡＫ七十四なら手に入るそうだ。ＲＰＧ七も手に入ると言っている」

ＡＫ七十四とは、ロシア製の小口径弾を発射する新式小銃だ。使用弾薬は五・四五ミリ、三十九・五弾を使用している。また、ＲＰＧ七はロシア製のロケット兵器であり、射程五百メートル、貫通能力三百二十ミリで現在の携帯用ロケット兵器の中では最高性能を有する。

「それに、俺達三人が加勢するが、これで手を打たないか？」

大黒は、スーツケースの蓋を閉め、ルスコイに渡した。

「明日の晩、決行する」

ルスコイがそれを聞いて、ロシア語で二人に話しかけた。二人はウオッカをグラスに並々とつぎ、右手で掲げ一気に飲み干した。それから、大黒に両手を差し出した。

「ちょうど良かったぜ。こいつら国に戻りたくて、

儲け話を捜していたところなんだ」

それから一時間位の間、大黒は三人に襲撃の手順について説明した。ニセコの別荘で練りに練った作戦だ。大黒の説明をルスコイが二人のロシア人に翻訳した。作戦会議は終わった。

「これから、どうするんだ？」

「この二人は武器の調達に向かう。俺は移動手段を確保する。お前はイリーナの家で待っていろ。明日の午後八時に迎えに行く」

「わかった」

ルスコイはスーツケースを開け、中身を均等に三分割し、イワノフとセルゲイに分配した。

「先に頂くことになるがいいか？明日、決行した後はそのまま国外に逃走するつもりなんだ」

「お前を信じるよ」

大黒を除く三人は、札束を懐に詰め立ち上がった。

「今日はゆっくり休養しろ」

ルスコイは、大黒にウィンクし、二人とともに店を後にした。

翌日の午後八時きっかりに、小樽の高台にあるイリーナ邸に一台のコロナが止まった。旧式の車種で、国内ではほとんど目にしない代物だった。

大黒は、車に近づいた。十分ほど前から外で待っていたのだ。イリーナは居間の窓際に立ちカーテンの隙間から様子を窺っていた。後部席のドアが開いた。

「時間に正確だな」

大黒が声をかけた。

「何しろ五千万だからな。さあ、乗ってくれ」

後部席にはルスコイが坐っていた。運転席と助手席にはイワノフとセルゲイが坐っていた。大黒は、ルスコイの隣に腰掛け、ドアを閉めた。車は静かに発進し、札幌に向けて走り出した。

「昨日は楽しんだか？」

ルスコイが意味ありげに話しかけた。

「最高だったよ」

「ははははは。イリーナはいい女だが、男運は無いな。いつも相手がいる男を好きになる」

「……」

「まあいい。これを扱ったことはあるか？」

ルスコイが座席に立てかけておいたゴルフバックから取り出したのはロシア製自動小銃のＡＫ七十四だった。銃身の下部に四十ミリグラネードランチャーが取り付けられていた。四十ミリグラネードとは対人用の高性能炸薬榴弾で着弾地点の殺傷範囲は直径十メートルに及ぶ。大黒は右手で、ピストルクリップを握り、左手をフォー・グリップに添えた。

「Ｍ一六なら実射の経験がある」

「それなら大丈夫だ。大した変わらない。こいつは四十ミリグラネードを発射できるんだ」

「ＧＢ十五なら聞いたことがある。Ｍ二〇三グラネード・ランチャーと変わらないだろう？」

「お前、軍隊経験でもあるのか？」

「アメリカ軍に体験入隊したことがある」

「ふうん」

ルスコイは大黒の顔をまじまじと見つめた。

「こいつはどうだ？」

足下に置いてあった筒状の物を持ち上げた。
「ＲＰＧ七だ。こいつにかかったら戦車でもイチコロだ」
大黒は、ＡＫ七十四を傍らに置き、ＲＰＧ七を両腕で抱えた。ずっしりとした重量感だ。
「ＡＫ七十四は人数分ある。こいつは二丁用意した。それに手榴弾もあるぞ」
「この車はどうしたんだ？」
「このおんぼろは、知人の倉庫に眠っていたものさ。今日だけ動いてくれりゃいい」
大黒は窓外に視線を移した。眼下に黒々とした日本海が、ぼんやりと見えた。

第八章　襲　撃

西区にある組事務所には四十分程で着いた。組事務所は鉄骨プレハブ二階建てで、建物の両サイドは駐車場と空き地になっていた。事務所の窓から灯りが洩れていた。組事務所と道路を挟んで向かえ側にある貸しビルの駐車場に車を止めた。大きな通りから少し奥にあり、深夜のためか人通り

はなかった。イワノフが、車のトランクからＲＰＧ七を取り出し、右肩に載せ、道路を一本挟んだ向かい側にある組事務所の一階に照準を合わせた。

距離にして十五メートル。ゆっくりと引き金を引いた。火線が組事務所の一階に　吸い込まれていった。閃光が走り、爆風とともに窓が内側から粉々になり吹き出した。組事務所が大音響とともに倒壊し、火の手があがった。

四人を乗せたコロナは、中央区方向に向かって走り出した。消防自動車のサイレンが街中に響きわたった。誰もそれがロケット弾によるものとは考えないだろう。ガス爆発か何かと思う方が自然だ。

中央区の中島公園近くにある組事務所には十五分程で着いた。事務所は五階立ての貸ビル二階にあった。コロナを貸ビルの隣の小路に止めた。

四人はそれぞれ、防弾スーツを着て、ＡＫ七十四を両手に抱え、貸ビルの非常階段を上がった。鉄製のドアの下に安全ピンを抜いた手榴弾を置き、三階側に階段をかけ上った。爆音とともにドアが

吹き飛んだ。間髪を入れず、階段を走り降り建物に入った。通路の奥にあった組事務所のドアも手榴弾で吹き飛ばした。入り口には三人の組員がドスを手に倒れていた。一人は片腕から先を爆風で吹き飛ばされていた。残りの二人は全身血塗れだった。皆瀕死の重傷を負っており苦痛の呻き声をあげていた。大黒の手にしたＡＫ七十四が火を吹き、弾丸が三人の体を貫いた。身体が海老のように反り上がり、痙攣し動かなくなった。事務所の奥の部屋から拳銃を手にした組員五人が一塊になって飛び出してきた。四人は横一列になりＡＫ七十四を撃ちまくった。五人の身体は至近距離からの五・四五ミリ、三九・五弾による衝撃で、ずたずたに引き裂かれた。弾装はあっと言う間に空になった。大黒は弾装を交換し、事務所の奥に向かった。奥は組員が寝起きする部屋だった。部屋には組員十人がドスや拳銃を手にし、大黒を待ちかまえていた。銃弾が何発か大黒の防弾スーツに食い込んだ。大黒はそれにはかまわず、ありったけの銃弾を部屋中に撃ち込んだ。弾装がからになっ

た時、部屋には四人以外動くものは見あたらなかった。とその時、事務所の奥から、押し殺したような呻き声が聞こえてきた。

「まだ、生き残りがいるようだな」

ルスコイがＡＫ七十四の弾装を交換しながら、奥に向かおうとした。

「待て、俺が行く」

大黒はルスコイの肩に手をおき、制止した。ＡＫ七十四を構え、事務所の奥を目指した。事務所の突き当たりには、ドアがあり、大黒は静かにそれを開けた。部屋の照明は消えており、暗闇で何も見えなかった。左手で壁を探り、照明のスイッチを押した。すぐに見つかりスイッチを押した。部屋が明るくなり、素っ裸の女を背後から羽交い締めにした男が、ダブルベッドに坐っている光景が浮かび上がった。男の手にはドスが握られており、切っ先が女の喉にあてられていた。女は二十歳を過ぎたばかりだろうか。恐怖にひきつった表情ではあるが、モデルのような美しい顔立ちをしていた。

「お前らどこの組のものだ？」
痩せて目ばかり異様に大きな男が、喚いた。
「女をはなせ」
「うるせいや。お前こそ銃を捨てろや」
「女を人質にでもしたつもりか？俺達には関係の無い女だ」
表情ひとつ変えず、ＡＫ七十四を女の乳房に向けた。
「女の影に隠れても無駄だ。こいつの弾は女の身体を貫通し、お前の心臓を破壊する」
「止めろ。頼むから止めてくれ。金だ。金をやる。そうだこの女も好きにしていいぞ」
男は、ドスを捨て女の身体を反対向きにして、大黒に向かって真白い尻を突き出させた。
「物わかりのいい奴だ。ひとつ教えてくれ権藤はどこだ？」
「組長は……」
「ダーン」その時、一発の銃声がして、男の額に血しぶきが上がり、向こう側の壁に血と脳症が吹き付けられた。男は女の胸に突っ伏した。女も失

神したらしく、二人で折り重なるようにベッドに倒れた。背後にルスコイが、ロシア製拳銃のマカロフを手にし、立っていた。

「これで全部片づいたな」

「ああ。いい腕だな」

「この女はどうする？俺達は国外にずらかるからいいが、お前は顔を見られているしな」

「……」

ルスコイが失神した女の身体をまじまじと見つめた。

「お前には罪も無い人間をばらすことはできないだろう？何なら俺達で預かろうか？」

「海外で売り飛ばすのか？」

「まあな。これだけの女だと、いい金になる。冗談だよ」

大黒は、気を失って倒れている女を抱き起こし、肩に担いだ。

「兎に角、連れていこう。ここに置いていたら、残党に消される」

「好きにするさ」

事務所内には血だらけの死体が散乱していた。中には着弾により、首が千切れかけている死体や、頭部に着弾し、頭蓋骨が破砕し乳白色の脳味噌をまき散らしている死体もあった。壁には銃弾による穴がいくつも穿たれ、硝煙が立ちこめていた。床が血だらけで滑りうまく歩けなかった。

ルスコイが二発の手榴弾を事務所奥に向かって投げつけた。大黒達は転がるように事務所を飛び出した。非常階段を降りている時、出口から手榴弾による爆風が勢い良く吹き出した。

コロナにたどり着いた時、四方から怒濤のようなパトカーのサイレンが近づいてきた。イワノフはコロナを小路の奥に向けた。三十メートル程で中島公園の入り口に着いた。コロナは中島公園に入り、公園内を豊平川方向へ向けて爆走した。公園を抜け、堤防から豊平川の河川敷地に降りた。河川敷地にあるサイクリング道路を上流側に向かって時速百キロで走行した。大黒は途中から西野と真駒内を結ぶ道道七百二十号に入るつもりだった。パトカーのサイレンが次第に遠のいていった。

一行を乗せたコロナは、夜半過ぎに小樽のイリーナ邸に到着した。大黒は、車中で失神から醒めた女の手を引き降りた。ルスコイが車の窓から、ＲＰＧ七とＡＫ七十四と二連式のデリンジャーを大黒に手渡した。デリンジャーとは、手の平に収まる小型サイズの拳銃だった。

「ゆっくり祝杯をあげたいところだが、船を待たせてあるんだ。こいつは選別だ」

「世話になった。祝杯はまたの機会にとっておこうぜ」

「じゃあな」

コロナはゆっくりと走り出した。大黒は女の手を引きイリーナ邸に入った。

イリーナに状況を説明するのが、大変だった。何しろ素っ裸の女を連れてきたのだから。車中では無言だった女だが、イリーナを見て安心したらしく権藤組の組員に拉致されるまでの話を切りだした。女の名前は、伊藤恵、今年二十歳になるＦ女子短大生だ。半月ほど前にススキノで飲んでいたところを、権藤組の組員に拉致されたとのことだ。

それ以来、起きているときは、売春を強要されるか、組員の慰みものにされていたとのことだった。話をひととおり聴き、大黒は恵をあらためて見つめ直した。暴力団が目を付けるだけあって確かに美しい容姿を持った女だった。

「それで、これからどうするんだ？」

「札幌には戻りたくありません」

「奴らが怖いのか？」

恵は無言で頷いた。イリーナがウオッカの酒瓶とグラスを持ってきた。

「これ飲むと少しは落ち着くわ」

大黒はウオッカのオンザロックを作り、恵の前のテーブルに置いた。

「きついから少しずつ飲むといい」

「有り難う」

恵は少し口に含み、喉に流し込んだ。

「田舎は、どこだ？」

「阿寒町です。でも田舎にも帰れない。あいつら私から田舎のことも聴きだしているから」

「俺に任せてくれるか？」

恵は大黒の瞳をじっと見つめた。
「俺が信じられないのも無理は無い。だが、奴らは俺の敵だ。皆殺しにするまであきらめない」
「貴方を信じられないという訳ではないの。ただ、あいつらが怖くて」
「少しの間、隠れ家に潜んでいたらいい。仲間もいるし、その間に俺が何とかするから」
「……お願いするしかないようね」
大黒は以外な展開に多少の戸惑いを覚えていた。恵が警察に走り込んでも仕方がない状況だった。暴力団による執拗な捜索を恐れてのことだろう。

大黒がニセコの別荘に着いたのは、翌日の午後三時過ぎだった。紀子と恵子の二人に迎えられた。ここでも、恵の事を説明するのに多少手間取った。ただ、二人はラジオで権藤組襲撃の件は知っていたので、状況を飲み込むのは早かった。紀子、恵子そして恵の三人は居間のソファーセットに座り、大黒の話に耳を傾けていた。ラジオからは、ひっきりなしに昨夜の襲撃事件を放送していた。

「まるで戦場です。死者が多数出たようです。暴力団権藤組が一夜にして壊滅してしまいました。警察当局は暴力団同士の抗争事件として捜査を開始しました……」

大黒はラジオのスイッチを切った。紀子が大黒の顔をじっと見つめた。

「私のために大勢の人を殺したんだわ」

大黒はそれには答えなかった。

「戦いは終わった訳じゃない。恵子に頼みがある。俺は二、三日中に紀子を埼玉に連れていく。その間、ここの留守を頼みたい」

「どれくらいの間？」

「たぶん一週間位だと思う」

「いいわ。恵さんもいるし、何とかなると思う」

同じ頃、権藤組組長権藤龍一と村瀬昭雄は、市内の隠れ家に潜伏していた。組事務所は二箇所とも襲撃によって破壊されていた。襲撃以来、焼け跡から大量の銃器やヘロインが見つかり、権藤組の幹部は皆、指名手配されていた。

隠れ家は、万一の場合に備えて倉庫を改造したもので地上二階地下一階の構造となっていた。外観は普通の倉庫と何ら変わりがない。建坪二百坪。二階を事務所と幹部の寝室、一階がその他組員の大部屋と台所になっていた。地下には拷問部屋と浚ってきた女達の監禁部屋があった。拷問部屋には鞭や拘束具等の七つ道具が置かれていた。

現在も数人の女達が監禁されており、幹部クラス以上の者は気が向けば、女を連れだし、拷問部屋でしたい放題に犯していた。平の組員には許されないことだった。権藤と村瀬は、二階事務所の一角にあるソファーセットで水割りを飲んでいた。そのすぐ近くの床には、全裸にされた美由紀が後ろ手を縛られ、床に転がらせていた。美由紀の顔は殴られて紫色に腫れ上がっていた。美由紀はバーテンの大内が、失踪した件で村瀬の拷問にかけられ、別荘が襲撃される数日前に店に来た男の事を話していた。

村瀬の拷問は、美由紀を素っ裸にして、四肢を平机に仰向けに縛り付け、大量の水を飲ませるも

のだった。水によって膨らんだ腹部にのり、強制的に吐かせ、それを何度も繰り返すのだった。水を飲まされている間は、息が出来ないので美由紀は苦しさのあまり何度も失禁した。村瀬は美由紀をいたぶるのを楽しんでいた。必要なことをはかせるのに、そんな手のこったことをする必要はなかった。美由紀は素っ裸で縛られた時点で、恐怖のために何もかも話していたのだ。村瀬は、その男が大内や紀子の事を根掘り葉掘り聞いていたことを美由紀から聞き出していた。男の名前や電話番号を書いたメモも村瀬に取られていた。

「組長、大黒とかいうやつの仕業だと思うんですが」

権藤の顔は組を失った怒りのあまり陰険なものとなっていた。

「そいつの身辺を調べあげるんだ」

「名前と電話番号から奴の住所が分かりました。今市内は警察の検問でやばいので、暫く様子を見るしかありません」

村瀬は一ヵ月前の、別荘の襲撃事件から、昨夜

の組事務所襲撃事件までのことを考えていた。
二週間前、別荘が火事だという知らせを聞いて調べに行っていた。現場では消防署員が消火活動を行っていた。火は村瀬が到着してすぐに鎮火した。全焼だった。現場から四人の黒こげになった焼死体と屋外の他殺体が一体発見された。別荘には全部で六人いた筈だ。村瀬は別荘の焼け跡から、空になった金庫を発見した。中には紙幣の燃え滓も見つからなかった。金庫には二億円が入っていた。その時は誰かが裏切ったと考えていた。しかし昨夜の組事務所襲撃によって、その考えを改めた。襲撃者による可能性が高まっていた。
「相手は事務所にいた全員を一瞬で殺している。プロの手口だ」
権藤が言った。
「あれだけのことをやるには単独だと思えません。裏に敵方の組が絡んでいるはずです」
村瀬は水割りを追加した。組員のひとりがすぐに替わりのグラスを持ってきた。
権藤が水割りのグラスを弄びながら、

「女は始末するんだ」
と言った。
村瀬は床に転がされた美由紀をちらっと見た。
「近藤。女を下に連れて行け。組員の好きにさせるんだ。殺してもかまわんぞ」
壁際に彫像のように立っていた男が動いた。身長は百六十センチくらいだががっちりとした体格はレスラー上がりのようだ。二の腕などは美由紀の太股ほどの太さがあった。床に転がっている真由美を一気に肩に担ぎ上げた。素っ裸の尻に頬ずりした。
「本当に殺ってもいいんですかい？」
「好きにしろ」
近藤はにやりと笑い、美由紀の裸の尻を左手でさすりながら、事務所を出ていった。
「組長。女を殺るのは簡単ですが。死体の始末をどうします？」
「そうだな。こんな状態じゃ。山奥まで運ぶ訳にはいかないな」
「……」

「どうした？」
権藤は、村瀬が含み笑いをしているのに気がついた。
「うまいアイデアが浮かんだんですよ。おい。厨房の陳を呼べ」
組員の一人に命じた。陳とは中国人のコックで数年前から組で雇っていた。歳は八十歳を越えていた。
「いつだったか陳と酒を飲む機会が、有りましてね。その時、酒に酔って聞かされた話が忘れられないものでね」
村瀬の話が終わらない内にドアが開き、コック姿の男が入ってきた。権藤が男に声を掛けた。
「よ。最近はどうだ？」
「ボスのお陰で何とかやっていますよ」

「その女は党に反逆した大罪人だ。よって処刑する。処刑はお前にまかせる。死体は、今晩の宴会用に料理しろ」

党幹部達が出ていき。厨房には当時十八歳になったばかりの陳と全裸で後ろ手を縛られた若い女の二人だけだった。女は調理用のテーブルに転がされていた。歳は陳よりも四、五歳上だろうか。猿轡をされているが、女は陳のこれまでの人生で会ったことも無いような美しい女だった。女の額には大粒の汗が流れ、陳の目をじっと見つめていた。女には陳が自分の生死を握っていることを痛いほど分かっているようだった。女のむき出しの股間には、男達による陵辱の跡が生々しく残されていた。

「今晩までにだって」

陳は独り言を言った。文化大革命時代の中国では、食人は珍しいことでは無かった。しかし、陳には人間を調理した経験など無く、ましてや女はまだ生きているのだ。殺人の経験すら無いのに残された数時間で女を殺し、調理することなど到底不可能に思えた。いっそのこと逃げ出そうかとも考えたが、党の報復が怖かった。それに党幹部の命令に従えば今後は安泰だった。若い陳の心にど

す黒い欲望が蠢いた。

「殺れるさ」

また独り言を言った。部屋を見回し、バケツと布きれを見つけた。さらに、厨房に続く物置からヒマシ油と浣腸器を探し出してきた。浣腸器は五百ＣＣのもので、太さが三センチ以上あった。浣腸器にヒマシ油を充填した。

「お前を美味しく料理してやるよ。蒸し焼きがいいかな。それとも餃子でも作るか」

腹を決めた陳には女をなぶる余裕ができていた。うつ伏せに寝かせた女の両足の間が丸見えだった。余裕とともに性欲がもたげてきたが、誰が何時やってくるかも知れないので、抑えることにした。女は目を閉じ、ぶるぶると震え始めた。陳は女の腹の下に手を入れ、尻を突き出すような格好にさせた。

「ウンチが残っていると肉が臭くなるからな」

毛が生えておらず、きれいなアヌスに注射器を押し込み、薬液をすべて注入した。直ぐに女の顔が蒼白になった。冷や汗が頬を伝って流れた。

「まだ出すなよ。出したら承知しないぞ」
陳は女を抱きかかえ、部屋の隅のバケツが置いて有るところまで運び、バケツの上で、子供におしっこをさせるような格好をさせた。
「いいぞ……早くしろ重いじゃないか」
言い終わらぬ内に女の排泄物がほとばしり出た。
「くせー」
そう言いながらも陳は鼻歌を歌い出した。バケツの排泄物を処理し、厨房の片隅にある洗い場のホースで女の身体を洗い流した。アヌスにホースの先を突っ込み、蛇口を一杯に開いた。女の腹が膨らみ、苦しそうにもがいた。陳はいっそ死んでくれたら楽だと思った。死にそうにも無かったのでホースを引き抜いた。間髪を入れずアヌスから勢いよく水が噴き出した。
次に大振りの中華包丁を持ち出した。女をここで処分し、解体することに決めた。女が必死に逃れようと身体をバタ尽かせたが後ろ手を縛られているので逃れることはできない。
「往生際が悪いぞ……俺を恨むなよ」

女の長髪を掴み、首を上に向けさせた。中華包丁を振り上げ思いっ切り叩き付けた。三振り目で首が落ちた。血が噴水のように吹き出て、陳の身体を真っ赤に染めた。首を部屋の隅に転がし、首無し死体にホースの水を吹きかけた。首の切断面から流れる血は、配水口に吸い込まれていった。女の両足に鍵つめのついたフックを掛け、天井につるした。完全に血が抜けるまで、木製の椅子に座りタバコを吸って待つことにした。吊された首無しの全裸死体を眺めた。こうやって吊されていると鳥や豚と変わらなかった。正直言って旨そうだ。

小一時間で出血は完全に止まった。次の工程は解体作業だ。女の身体の下にたらいとバケツを置き、細身のナイフを下腹部に当て一気に下に引き裂いた。

腸がはみ出し、生臭い匂いが立ちこめたがかまわず、腹腔に右手を入れ、腸を掴みだした。中は火傷しそうなほど熱く感じられた。腸を傷つけないように慎重にバケツに入れた。腸が破れると内

容物で肉が汚れるからだ。浣腸を施しても完全にきれいになる訳ではない。腸の次に肝臓や心臓を取り出しタライに入れた。その他の臓器はゴミ箱に無造作に捨てた。女の身体をフックから外し、調理用テーブルに仰向けに載せた。両乳房を中華包丁で切り取りタライに入れた。次に両手両足を中華包丁で切断した。だるまのようになった身体の股間部分を細身の包丁で切り取った。身体を裏返し、豊かな尻の双球に切れ目を入れ、赤みの肉を拳大ほどに次々に切り取っていった。両足の太股の部分はブロック大に切り取った。背中や脇腹や胸肉も器用に切り取った。残った手足の部分は、ぐらぐらと煮え立った大鍋に投げ込んだ。中華スープ用だ。その他の残骸はゴミ箱に捨てた。テーブルの上には切り取られた肉や内臓が入ったタライやバケツが置かれていた。後は、ミンチや餃子を使った肉料理を作るだけだ。

陳の回想は終わった。陳の前に話にじっと耳を傾ける権藤と村瀬の姿があった。権藤の顔がだらしなく歪んでいた。女を解体し調理する話に興奮

したようだ。
「陳。今でもやる自信はあるのか？」
権藤の声は掠れていた。
「……ボスには恩義があります。やれと言われりゃ何でもやりますよ」
陳の暗い声が響いた。
「ひとり始末しなきゃならない女がいるんだ。組を裏切った奴でね。その死体の始末をどうしようかと考えていたんだ」
村瀬が考え深げに話した。
「調理するのは簡単ですが、誰が食べるんですか？」
陳が村瀬に尋ねた。
「下の連中に喰わせようと思っている。内緒でね。ははは」
村瀬は、歪んだ笑いを見せた。
「村瀬、俺も喰ってみたいな。美由紀の尻を」
「どうぞ。ご自由に」
それから二時間後、近藤がぐったりとした美由紀をかついで事務所に上がってきた。尻が丸見え

となっており、アヌスが陵辱の跡らしく、赤く腫れ上がっていた。

「殺ったのか？」

ソファでウィスキーを飲んでいた村瀬が身を乗り出した。

「いや。まだ生きていますよ。村瀬の兄貴にお任せしょうと思いましてね」

女を陵辱の果てに、殺すのが村瀬の悪習だった。

「今日は陳にまかせたんだ。厨房に連れて行け」

近藤は、事情が飲み込めないらしく呆然とした表情で立っていた。

「早くしねえか！」

近藤はとにかく従うことにした。事務室を出て一階の厨房に向かった。厨房では陳が、夕食の仕度にかかっていた。調理用テーブルには玉葱やピーマンといった野菜がいっぱい詰まったボウルが置かれていた。ガスレンジには油をしいたフライパンや水を一杯に満たした大鍋が置かれていた。

「陳。親分が女の始末をしろとさ」

陳は、調理用テーブルの上を顎で示した。近藤が

美由紀を調理用テーブルに寝かせ、厨房を出ていった。

美由紀は全裸姿で後ろ手に縛られ、失神していた。猿轡をはめられていた。肉付きのいい太股に触り、押し開いた。膣とアヌスは激しい陵辱のためか赤く腫れ上がっていた。そこに舌を付け、舐め回した。薄い血の匂いとともに、若い女の素晴らしい味がした。重たげな乳房を掴み上げ、力いっぱい握り締めた。

「うっ」と呻いて目を覚ました。

美由紀は清楚な顔に似合わず、グラマーな肢体を持っていた。

「お前を殺して、調理しなければならない」

美由紀の瞳が大きく開いた。嫌々とかぶりをふり、後去ろうと藻掻いた。何とか四つん這いになり、豊かな尻を陳の方に付きだし許しを請おうとした。

「無駄な命乞いは止めろ。お前はここに連れてこられた時点で、人ではなくなった。ただの牝豚となったんだ」

陳は、深い尻の割れ目に顔を押し込み、舌で舐り

回した。
アヌスに舌先を、可能な限り奥に向かって差し込んだ。
「ああ……いい……」
美由紀の心は、死に対する恐怖に揺り動かされながら、暗い欲望に強く反応していた。四肢を大きく突っ張り、押し殺したような喘ぎ声をあげ始めた。アヌスから、ピンク色の柔肉が襞となった膣に舌先を滑らせた。愛液が滲む襞をかき分けて、肉汁を啜った。
美由紀は既に観念していた。全身の力を抜き、陳にすべてを委ねた。陳は慌ただしくズボンを脱ぎ、いきり立った男根を、尻に突き立て狂ったように腰を突き動かし始めた。
絶頂に達する寸前、陳は刺身包丁で背中を一突きにした。血飛沫が上がり、膣が激しく痙攣した。盛り上がった白い尻の双球がブルッと震えた。陳は尻を抱きアヌスに放出しながら美由紀の頸動脈を切断した。
「ギャー！」

断末魔の叫びを上げ、全身を震わせる美由紀を仰向けにし、むっちりとした太腿を押し開き、膣に齧り付いた。包皮を捲り、クリトリスを一気に噛み切った。生暖かい血液が口中に広がった。濃厚な血臭が滲み出る肉片を咀嚼し飲み込んだ。

陳は死にゆく美由紀を垣間見ながら、若い女は最高の獲物だと考えていた。性欲を吐き出すことができ、最高の食材ともなり得るのだ。

陳は絶命した美由紀の両足首を荒縄で縛り、それをローツの付いたフックにかけて、天井に固定されていた滑車にかけて、天井から頭部を下に向けて吊るした。

近くの椅子に腰掛け、タバコに火をつけた。

すぐ目の前に逆さまの状態で吊り下げられた美由紀の裸身に煙を吹きかけた。

陳は文化大革命の頃に中国で殺して調理した美しい女のことを思い出していた。

「まったく、豚や鳥と同じじゃないか」

陳は美由紀の肉体を見ながら、独り言を呟いた。

三十分後、陳は美由紀を調理台の上に横たえ、鋭利な刺身包丁を使い、腹部を縦に切り裂いて、内臓を取り出しにかかった。

内臓をすべて、取り終えてから、大振りの中華包丁を使って手足の切断に取り掛かった。

美由紀をダルマにしてから、寝ていても崩れない重たげな両乳房を刺身包丁で切り取った。さらにうつ伏せにさせて、盛り上がった白い尻に刺身包丁を入れ、肉塊を切り取った。

むっちりとした太腿からも刺身包丁で赤身の肉を切り取っていく。

太腿肉はステーキ台に切り分けた。

尻肉は一口大の大きさにして、唐揚げ粉を塗して、揚げ物用の鍋で唐揚げにしていく。

脂がのった乳房の肉は細かく刻み、同じくミンチにした腿肉と合わせて、千切りにしたニラやキャベツ等の野菜と混ぜ合わせ、餃子の皮で包んで、揚げ餃子や水餃子にした。

太腿肉を切り取った後の大腿骨は、野菜と一緒に深底鍋に入れて、中華スープにした。

陳は鼻歌を歌いながら、手際良く美由紀の肉で料理を作っていく。

肝臓は薄くスライスして、皿に盛り付けた。

一切れ、何も付けないで口に入れた。一瞬で口の中で溶けて、芳醇な肉の甘みが一杯に広がった。あまりの美味しさに思わずため息を漏らしてしまった。

大腸や肛門はよく水洗いをして、細かく切断した。これで、モツ鍋を作るつもりだった。

陳は大腸の切り身をガスレンジに載せた網でさっと焦げ目をつけて、軽く塩を振って食べて見た。これも癖が無く絶品だった。

老酒をコップで一口飲んでから、もう一切れ食べてみた。

陳の顔に満面の笑みが広がっていく。これは若い女の肉そのものだった。美由紀の裸身を思い浮

かべながら、肉の味を堪能した。

その夜、権藤組の夕食は豪勢だった。テーブルには餃子や肉団子や空揚げといった肉料理が所狭と並んでいた。いつになくいい匂いが部屋中に満ちていた。十数人の組員達が席に付き、一斉に料理を食べ始めた。料理人の陳が部屋の隅で中華スープを配っていた。

「陳。今日の料理は格別だな。この肉の味は最高だよ」

「何の肉なんだ？」

「ただの豚肉ですよ」

「この中華スープも出汁が効いていて旨いね」

権藤と村瀬は、幹部用のテーブルで一部始終を眺めていた。権藤が手をあげて陳を呼んだ。

「陳、尻の肉を喰わせろ」

「はい」

陳は急いで中央のテーブルに盛りつけられた照り焼き肉を皿に載せソースをかけて戻ってきた。

「ご希望の若い牝豚の尻肉です」

「ふむ」

権藤はフォークとナイフで肉を切断し、一切れを頬張った。口中にジュシーな肉汁の味が広がっていった。

「う。旨い。こんな肉は初めてだ。村瀬もどうだ」

「陳。牝豚のあそこの肉はどうした？」

「はい。ただ今お持ちします」

村瀬は陳が取皿に盛られた肉汁が滴る美由紀の膣肉を、美味しそうにほお張った。

それ以来、権藤と村瀬は若い女の肉に異常なまでの関心を示すようになった。地下の拷問室に捕らわれていた女達のうち、性交奴隷として飼うことに決めた女以外を様々な調理方法で調理し、食するようになった。二十歳を過ぎたばかりの若く美しい女達が、地下の飼育室に全裸で繋がれ、肉質を高めるために果物だけで飼育された。

肉が無くなれば、陳の手によって殺害調理され組員達の食卓に供せられた。

そのうち、組員達は若い女の肉しか、受け付けなくなった。

第九章　人肉の宴へと続く